

平成 26 年 度
(平成25年度実績)

九州龍谷短期大学・東九州短期大学

相互評価報告書

平成27年3月

九州龍谷短期大学・東九州短期大学

目次

はじめに（両短大学長のことば）	1
1. 九州龍谷短期大学・東九州短期大学の概要 （沿革・学科構成等）	2
2. 相互評価協定書	6
3. 相互評価実施の経過 （実施要項、委員会名簿）	7
4. 平成26年度相互評価会議 （日程、出席者、次第、議事録）	11
おわりに（両短大相互評価委員のことば）	36

はじめに

九州龍谷短期大学学長 後藤 明信

平成27年度に東九州短期大学が第三者評価を受けられるにあたり、私たちが平成22年度に受けた第三者評価の際に、東九州短期大学とともに歩んできた相互評価活動が大変参考になったことを想起しております。建学の精神等、お互いに共通項の多い短大同士として、評価内容、創意工夫、表記等、さらに小規模短期大学における経営・運営面の取り組みについて、お互いに学びあい、意見を交わし、自身の大学を見つめなおす機会となってきました。これらの活動の報告書として、平成26年度相互評価報告書が刊行されましたこと、嬉しく思います。

熱意ある東九州短期大学の先生方の弛まぬ努力により、私たちとの多方面にわたる協力関係が築かれて、相互評価に活かされ、本報告書ができました。東九州短期大学の梅高学長をはじめ緒方ALO、そして諸先生方に厚く御礼を申し上げます。

親鸞聖人の教えのもと、学生の人生における学びの方向付けと実践教育に、両大学がこれからも多くの示唆を与え合うことができる大学であり続けるために、今後の相互評価および第三者評価活動に努力していきたいと考えております。

東九州短期大学学長 梅高 賢正

平成25年度の実績を基にした九州龍谷短期大学・東九州短期大学の相互評価報告書の刊行にあたり、両短期大学の関係者の皆様に感謝申し上げ、一言ご挨拶申し上げます。

今回の相互評価は本学が二巡目の認証評価を控えた中での開催となりました。新基準による自己点検評価となり、本学では今まだ課題も多く、試行錯誤の状態ではありますが、九州龍谷短期大学の先生方からのご助言をいただき、改めて授業改善や経営改善に向けた意識が高まりました。共に龍谷総合学園に属し、建学の精神が共通する信頼の下、細部にわたるご指摘は両短期大学の発展につながるものと信じています。

最後に、ご多忙のところを本学までお越しいただき貴重なご意見をいただいた後藤学長をはじめ九州龍谷短期大学の先生方に深く感謝申し上げるとともに、貴学の益々の発展を念じ、ご挨拶といたします。

1. 九州龍谷短期大学・東九州短期大学の概要

(1) 九州龍谷短期大学の所在地、理事長、学長、位置、周囲の状況等

① 所在地 〒841-0072 佐賀県鳥栖市村田町岩井手1350

② 理事長 学校法人佐賀龍谷学園 井浦 順爾

③ 学長 後藤 明信

④ 短期大学の位置、周囲の状況等

佐賀龍谷学園は、浄土真宗本願寺派の小教校のひとつとして明治11年に佐賀市願正寺内に設置された振風教校に淵源をもつ。振風教校は、西肥中学校、第五仏教中学校、私立龍谷中学校へと校名を変更しつつ継承され、佐賀市願正寺内にあった校地は、明治35年、第五仏教中学校の時より、現在の学園所在地である佐賀市水ヶ江に移転された。昭和23年には新制龍谷高等学校が設立され、昭和26年、佐賀龍谷学園は財団法人から学校法人へと組織を変更した。佐賀龍谷短期大学は昭和27年に仏教科の単科短期大学として佐賀市水ヶ江に設置され、昭和29年に国文科、同37年に保育科、そして同42年には付属慈光幼稚園(後に龍谷幼稚園)を発足させた。

昭和60年には、短期大学の校地を鳥栖市に移転し、校名を九州龍谷短期大学と改めた。爾来、仏教、特に親鸞精神を建学の精神として多くの人材を育成し、地域社会に貢献してきた。学生は、佐賀県、福岡県出身者を主とするも、他の九州各県からの入学者も多い。

⑤ 九州龍谷短期大学の沿革

【佐賀龍谷短期大学の設置まで】

明治11(1878)年 佐賀県下真宗寺院の共同により佐賀市高木町願正寺境内に「振風教校」を設置し、仏典、漢籍のほか算術、物理、地理を教授

明治33(1900)年 「西肥仏教中学校」と改称

明治35(1902)年 佐賀市水ヶ江に校舎を移転し「第五仏教中学校」と改称

明治41(1908)年 「龍谷中学校」と改称

明治45(1912)年 私立「龍谷専修学院」を併設

昭和22(1947)年 新制龍谷中学校を併設

昭和23(1948)年 新制龍谷高等学校を設立

昭和26(1951)年 佐賀龍谷学園が、財団法人から学校法人へと組織を変更

【九州(佐賀)龍谷短期大学のあゆみ】

昭和27(1952)年 「佐賀龍谷短期大学(仏教科単科)」を開学

昭和29(1954)年 佐賀龍谷短期大学に「国文科」を増設

昭和30(1955)年 「佐賀龍谷幼稚園教員養成所」を開設

昭和37(1962)年 佐賀龍谷短期大学に「保育科」が増設され、「仏教科」、「国文科」、「保育科」の3科になる

- 昭和38（1963）年 佐賀龍谷幼稚園教員養成所を廃止
- 昭和42（1967）年 佐賀龍谷短期大学「付属慈光幼稚園」を開設
- 昭和53（1978）年 佐賀龍谷学園創立100周年記念式典
- 昭和57（1982）年 佐賀龍谷短期大学開学30周年式典
- 昭和60（1985）年 佐賀龍谷短期大学を佐賀県鳥栖市村田町に移転開学し、「九州龍谷短期大学」と名称を変更
- 昭和63（1988）年 佐賀龍谷学園創立110周年記念式典
- 平成 4（1992）年 九州（佐賀）龍谷短期大学開学40周年
- 平成 9（1997）年 「仏教科」「国文科」にそれぞれ「福祉コース」を開設
- 平成13（2001）年 「仏教科」「国文科」「保育科」を、「仏教学科」「日本語・日本文化学科」「保育学科」と名称を変更
- 平成14（2002）年 九州龍谷短期大学開学50周年を迎え、「仏教学科」「日本語・日本文化学科」を改組し、「人間コミュニティ学科」を設置
- 平成20（2008）年 人間コミュニティ学科内に「映像・放送コース」を開設
佐賀龍谷学園創立130周年
- 平成23（2012）年 財短期大学基準協会による第三者評価において適格と認定される

（2）東九州短期大学の所在地、理事長、学長、位置、周囲の状況等

① 所在地 〒871-0014 大分県中津市一ツ松211

② 理事長 学校法人扇城学園 梅高 賢正

③ 学 長 梅高 賢正

④ 短期大学の位置、周囲の状況等

扇城学園の位置する中津市は、大分県の北端に位置し、山国川を挟み福岡県と隣接している。平成17年に旧下毛郡と合併し、人口は約8万7千人となった。

旧下毛郡の大部分は耶馬日田英彦山国定公園の中にあり、特に文政元年（1818年）詩聖頼山陽がこの地に立ち寄り、「耶馬の溪山天下に無し」と激賞したことから、この地が広く知られるようになった。

中津は、九州における浄土真宗源流の地であるとともに、「法義どころ」として数多くの和上、傑僧を輩出している。著名な本願寺派の宗学者を挙げれば、豊前学派の創始者である月珠、空華学派の大成者である善譲をはじめ、田丸慶忍、摂受吐月、松嶋善海が勧学を授けられている。

また、中津市街地は、古くから城下町として商業が栄えるとともに、文化が発達し、次のような優れた人材も輩出している。江戸時代には、蘭学の創始者である前野良沢や国学者の渡辺重名、儒学者の白石照山など、明治に入ってからには啓蒙思想家で著名な福澤諭吉をはじめ、歯科医の祖といわれている小幡英之助、実業家では中上川彦次郎（三井）、和田豊治（富士紡績）ら、また酪農の草分けとされる宇都宮仙太郎（雪印）、道徳科学の広池千九郎などが挙げられる。

このような自然や歴史と文化に育まれた中津市は、現在、大分県の県北における中核都市としての役割を果たし、中津バイパスをはじめとする交通網の整備、重要港湾である中津港の整備、2004年末に操業したダイハツ九州(株)大分（中津）工場をはじめとする自動車関連企業誘致等、北九州と大分を結ぶ連絡拠点としてのまちづくりが進められている。

⑤ 東九州短期大学の沿革

【学校法人扇城学園の沿革の概要】

- 明治32（1899）年 「仏教特に浄土真宗の教義に基づく宗教教育を施し、貞淑なる女子を育成する」という教育目的をもって、梅高秀山が中心となり、扇城女学校を創立（旧中津城三ノ丁）
- 大正11（1922）年 現在の東九州龍谷高等学校地に移転（中津市中殿527）
- 大正12（1923）年 扇城高等女学校認可（1948年まで）
- 昭和6（1931）年 高等家政女学校設置（1948年まで）
- 昭和23（1948）年 扇城高等学校設置認可
- 昭和26（1951）年 学校法人扇城学園に組織変更
- 昭和40（1965）年 地域社会の強い要望により短期大学設立準備に着手
- 昭和44（1969）年 扇城高等学校に食物科増設（調理師養成施設の指定を受ける）
- 昭和53（1978）年 扇城高等学校に衛生看護科増設（准看護学校の指定を受ける）
- 昭和55（1980）年 中津女子短期大学附属幼稚園設置
- 昭和62（1987）年 扇城高等学校バレーボール部三冠達成（選抜・高校総体・国体）
- 平成8（1996）年 扇城高等学校バレーボール部二冠達成（高校総体・国体）
- 平成9（1997）年 扇城高等学校から東九州龍谷高等学校へ名称変更（男女共学）
- 平成11（1999）年 扇城学園創立100周年
- 平成20（2008）年 東九州龍谷高等学校、生活文化科募集停止
東九州龍谷高等学校バレーボール部二冠達成（選抜・高校総体）
- 平成21（2009）年 扇城学園創立110周年

【東九州短期大学の沿革の概要】

- 昭和42（1967）年 中津女子短期大学（家政科）開学
- 昭和43（1968）年 中津女子短期大学に幼児教育科増設
- 昭和44（1969）年 中津女子短期大学、家政科を家政専攻と食物栄養専攻に分離
- 昭和54（1979）年 中津女子短期大学、家政科と幼児教育科を、家政学科と幼児教育学科へ名称変更
- 昭和55（1980）年 中津女子短期大学附属幼稚園設置
- 平成3（1991）年 中津女子短期大学から東九州女子短期大学へ名称変更
- 平成12（2000）年 男女共学
- 平成13（2001）年 家政学科家政専攻募集停止
- 平成14（2002）年 東九州女子短期大学から東九州短期大学へ名称変更
家政学科専攻分離廃止
- 平成17（2005）年 家政学科から食物栄養学科へ名称変更
- 平成20（2008）年 財短期大学基準協会による第三者評価において適格と認定される
社）全国栄養士養成施設協会より栄養士養成功労表彰を受ける

(3) 九州龍谷短期大学の学科構成、定員、在籍数、教員構成、取得資格

学科	コース	年度	在籍者数 入学定員 (収容定員)	教員構成	取得資格
人間コミュニティ	仏教	25	$\frac{91}{50}$ (100)	教授 4 准教授 2 講師 1	本願寺派教師 (学科試験免除) 本願寺派学階 (予試・本試免除) 実践仏教者養成基礎課程
	司書・情報	26	$\frac{83}{50}$ (100)	教授 4 准教授 3 講師 0	情報処理士
	映像・放送				ビジネス実務士 レクリエーション・インストラクター 図書館司書 映像・放送専門課程
保 育		25	$\frac{119}{75}$ (150)	教授 3 准教授 5 講師 1	幼稚園教諭二種免許状 保育士資格 社会福祉主事任用資格
		26	$\frac{105}{75}$ (150)	教授 3 准教授 4 講師 2	レクリエーション・インストラクター 仏教保育基礎課程

(4) 東九州短期大学の学科構成、定員、在籍数、教員構成、取得資格

学 科	年度	在籍者数 入学定員 (収容定員)	教員構成	取得資格
食物栄養学科	25	$\frac{69}{40}$ (80)	教授 4 准教授 1 講師 1 助教 1 助手 2	栄養士 栄養教諭二種免許 医療管理秘書士 医事管理士
	26	$\frac{68}{40}$ (80)	教授 4 准教授 1 講師 1 助教 1 助手 2	
幼児教育学科	25	$\frac{64}{50}$ (100)	教授 3 准教授 2 講師 1 助教 2	幼稚園教諭二種免許 保育士 保健児童ソーシャルワーカー
	26	$\frac{62}{50}$ (100)	教授 3 准教授 2 講師 1 助教 2	

2. 相互評価協定書

自己点検・評価 相互評価協定書

このたび東九州短期大学と九州龍谷短期大学は自己点検・
評価の相互評価を行うことに合意する。

両大学は、平成15年度より継続的に相互評価を行うこと
によって、相互の向上、啓発、研鑽、協力に努めることとする。

平成 16年 3 月 18日

平成 16年 3 月 18日

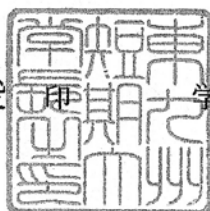
大分県中津市一ツ松211

佐賀県鳥栖市村田町岩井手1350

東九州短期大学

九州龍谷短期大学

学長 二五田 公俊



学長 川崎 惠璋



3. 相互評価実施の経過

(1) 九州龍谷短期大学・東九州短期大学 相互評価実施要項

九州龍谷短期大学・東九州短期大学 相互評価実施要項

1. 相互評価の目的

両大学は相互評価を行うことにより、自己点検・評価の質的向上を図り、それぞれ教育・研究機関としての充実・向上に積極的に取り組む契機としていくものとする。

2. 相互評価の方法

両大学は、毎年度、自己点検評価報告書、シラバス、学生便覧、大学案内等の関係資料を交換し、相互評価会議を通して相手校の現状と問題を把握し、相互に点検・評価するものとする。

なお、相互評価会議の開催場所はそれぞれの大学の持ち回りとする。

3. 相互評価項目について

相互評価の項目については、平成16年度に短期大学基準協会が示した第三者評価基準に則り、毎年度、協議の上、設定するものとする。

4. 相互評価報告書について

相互評価会議終了後、相互評価結果について報告書を作成し公表するものとする。報告書の内容については、その都度、協議し決定するものとする。

5. 以上の要項については、必要に応じ両校の協議を通して見直しを図り、より現実に即した形で相互評価を進める。

この要項は平成16年7月1日より発効する。

平成16年7月1日

東九州短期大学
自己点検評価委員長

篠原 寿子

九州龍谷短期大学
自己点検評価委員長

松田 祐子

東九州短期大学と九州龍谷短期大学相互評価実施要項

1. 相互評価の目的

両大学は相互評価を行うことにより、自己点検・評価の質的向上を図り、それぞれ教育・研究機関としての充実・向上に積極的に取り組む契機としていくものとする。

2. 相互評価の方法

両大学は、隔年度、自己点検評価報告書、シラバス、学生便覧、大学案内等の関係資料を交換し、相互評価会議を通して相手校の現状と問題を把握し、相互に点検・評価するものとする。
なお、相互評価会議の開催場所はそれぞれの大学の持ち回りとする。

3. 相互評価項目について

相互評価の項目については、短期大学基準協会が示した第三者評価基準に則り、協議の上、両校で設定するものとする。

4. 相互評価報告書について

相互評価会議終了後、相互評価結果について報告書を交互に作成し公表するものとする。
報告書の内容および費用については、その都度、協議し決定するものとする。

5. 以上の要項については、必要に応じ両校の協議を通して見直しを図り、より現実に即した形で相互評価を進める。

この要項は平成16年7月1日より発効する。

この要項は平成22年4月1日より実施する。

東九州短期大学 学長 二五田 公 俊

九州龍谷短期大学 学長 貞 松 征 夫

(2) 相互評価委員会（兼自己点検評価委員会）委員構成

①平成25年度

○九州龍谷短期大学

自己点検 評価委員会	氏 名	職 名	役 職 等
委員長	貞 松 征 夫	保育学科教授	学長
ALO	江 原 由 裕	人間コミュニティ学科准教授	作業部会委員
副委員長	小 林 旭	保育学科教授	学生部長、入試対策委員長、寮長
委員	熊 谷 法 明	法人事務局長	
委員	木 原 すみ子	人間コミュニティ学科長	図書館長
委員	松 田 祐 子	保育学科長	
委員	原 理 夫	事務長	
委員	藤 戸 好 浩	学務課長	
委員	水 頭 順 子	保育学科教授	作業部会委員
委員	原 田 泰 教	人間コミュニティ学科講師	作業部会委員
委員	井 手 典 子	保育学科准教授	作業部会委員
委員	藤 木 法 順	教務係	作業部会委員

○東九州短期大学

自己点検 評価委員会	氏 名	職 名	役 職 等
委員長	梅 高 賢 正	食物栄養学科教授	学長
ALO	緒 方 義 英	幼児教育学科准教授	
委員	篠 原 壽 子	食物栄養学科教授	副学長
委員	伊 東 裕 子	食物栄養学科教授	食物栄養学科長
委員	尾 家 京 子	幼児教育学科教授	幼児教育学科長
委員	有 吉 英 樹	食物栄養学科教授	図書館長
委員	室 長 大 應	幼児教育学科教授	学生支援センター長
委員	山 本 博 宣	事務長	
委員	島 田 知 和	幼児教育学科助教	
委員	室 屋 かおり	食物栄養学科助手	

②平成26年度

○九州龍谷短期大学

自己点検 評価委員会	氏 名	職 名	役 職 等
委員長	後 藤 明 信	人間コミュニティ学科教授	学長
ALO	江 原 由 裕	人間コミュニティ学科准教授	
副委員長	内 野 安 成	人間コミュニティ学科教授	学生部長
委員	岡 田 真	法人本部事務局長	
委員	木 原 すみ子	図書館長	作業部会委員兼任
委員	高 橋 幸 平	人間コミュニティ学科長	
委員	水 頭 順 子	保育学科長	作業部会委員兼任
委員	原 理 夫	事務長	
委員	藤 戸 好 浩	学務課長	
委員	井 手 典 子	保育学科准教授	作業部会委員
委員	藤 木 法 順	教務係	作業部会委員

○東九州短期大学

自己点検 評価委員会	氏 名	職 名	役 職 等
委員長	梅 高 賢 正	食物栄養学科教授	学長
ALO	緒 方 義 英	幼児教育学科准教授	
委員	篠 原 壽 子	食物栄養学科教授	副学長
委員	伊 東 裕 子	食物栄養学科教授	食物栄養学科長
委員	尾 家 京 子	幼児教育学科教授	幼児教育学科長
委員	有 吉 英 樹	食物栄養学科教授	図書館長
委員	室 長 大 應	幼児教育学科教授	学生支援センター長
委員	山 本 博 宣	事務長	

4. 平成26年度相互評価会議

(1) 日 時：平成26年9月11日（木） 10：00～16：30

(2) 場 所：東九州短期大学 4 番教室

(3) 出席者

九州龍谷短期大学	後 藤 明 信 江 原 由 裕 原 理 夫 内 野 安 成 藤 木 法 順	自己点検・評価委員長 学長 ALO、作業部会長 自己点検・評価委員 事務長 自己点検・評価委員 学生部長 作業部会委員 教務係
東九州短期大学	梅 高 賢 正 緒 方 義 英 篠 原 壽 子 山 本 博 宣 伊 東 裕 子 尾 家 京 子 室 長 大 應 有 吉 英 樹 島 田 知 和 城 戸 佐智子 室 屋 かおり	自己点検評価委員長 理事長 学長 ALO 自己点検評価委員 副学長 自己点検評価委員 事務長 自己点検評価委員 食物栄養学科長 自己点検評価委員 幼児教育学科長 自己点検評価委員 学生支援センター長 自己点検評価委員 図書館長 記録 幼児教育学科助教 庶務 幼児教育学科助教 書記 学生支援センター員

(4) 平成26年度相互評価会議次第

1. 開会のことば
2. 学長挨拶
東九州短期大学学長 梅高賢正
九州龍谷短期大学学長 後藤明信
3. 出席者自己紹介
4. 議事
 - i 東九州短期大学 第三者評価シミュレーション
 - ii 相互評価報告書の編集について
 - iii 今後の相互評価活動について
5. 結語
東九州短期大学 ALO 緒方義英
6. 学長挨拶
九州龍谷短期大学学長 後藤明信
東九州短期大学学長 梅高賢正
7. 閉会の挨拶

(5) 平成26年度相互評価会議（委員会） 議事録

- i 東九州短期大学 第三者評価シミュレーション
- ii 相互評価報告書の編集について
- iii 今後の相互評価活動について

○は九州龍谷短期大学委員

□は東九州短期大学委員

午前の部

- 緒方：それでは会議次第に沿って進めて参ります。ただいまから、平成26年度相互評価会議を始めます。最初に東九州短期大学の梅高学長よりご挨拶申し上げます。
- 梅高：皆さんおはようございます。九州龍谷短期大学の皆様には、早朝よりお越しいただき、ありがとうございます。この相互評価も何度かやっておりますが、最近は隔年開催ということで、さらに半日開催ということでやっておりました。今回は、我々が来年度第三者評価を控えているということで、1日開催をお願いしたところ、快く受けていただき大変ありがとうございます。第三者評価は、これからの短期大学が活性化していくことが大きな目的であろうと思います。考えてみますと、特に学生の充足率ですとか、財務は年々厳しくなっています。そのような中、第三者評価に振り回されているような気も若干しております。ただ、学校を改善することが主眼でありますので、そのことを忘れずに、先生方からご指摘、ご指導をいただいて、来年度の第三者評価に備えていきたいと思っております。その後、貴学も第三者評価を受けられるということで、本学のものが参考になればと思っております。どうぞ1日よろしくお願い致します。
- 緒方：九州龍谷短期大学の後藤学長にご挨拶をお願い致します。
- 後藤：おはようございます。この4月から学長になりました後藤と申します。よろしくお願い致します。第三者評価は、貴学が先に受けられ、その後私たちも受けますので、互いによりよい学校運営に向け、プラスになるようにと思っております。お互いに親鸞聖人の教えを建学の精神にしております。昨日まで日本仏教会に行っておりましたが、そこで問題になったのが、社会とどう関わっていくのか、ということでした。仏教の本質的な問題でもありますけれども、仏教が現代社会とどのように関わっていくか。建学の精神を浄土真宗の精神としているものとしては、そこに生きていく道が開かれていく一つのヒントがあるのではないかと思います。ぜひ、いろいろなことを教えていただきたいと思っております。どうぞよろしくお願い致します。

自己紹介

東九州短期大学：篠原、緒方、山本、伊東、尾家、有吉、室長

九州龍谷短期大学：江原、原、内野、藤木

- 緒方：東九州短期大学の平成25年度自己点検・評価報告書に対して質問を頂いておりますので、それをもとに進めて参ります。なお、重複する内容についてはまとめて回答致します。

i 東九州短期大学 第三者評価シミュレーション

基準 I

質問事項

「建学の精神と教育の効果」について、建学の精神を示す文章の中に、知識、人格形成、慈しみ、内省、実践、感謝とあるが、3つの方針（3ポリシー）にどのように関連づけられるか。また、基準 I - B 「建学の精神と3ポリシーの関連について」で、学長の説明とはどのようなものか。

建学の精神と3ポリシー

- 梅高：建学の精神と3ポリシーの関連性は難しい問題である。3ポリシーを学科で作ったときに、そこまで建学の精神との関連を意識したものではなかった。学長として学生に説明をしているのは、入学当初のオリエンテーションで建学の精神、特に命の尊さや人格形成、慈しみについて話をしている。食物栄養学科は食と命を関連づけ、命あるものをいただいているという感謝の気持ちについて話し、幼児教育学科では、人格形成の中で大切な時期を預かるものとして、その基礎となるべき精神が建学の精神にあると話している。各分野、それぞれの授業においても、建学の精神に説かれる精神を忘れずに取り組んでもらえればと思っている。宗教的情操教育は内面的な問題が多く、それをどう表現していくかは難しい。本学のような小さな短期大学は、幼児教育学科も食物栄養学科も各学年1クラスで、学生数もそれぞれ30名くらいなので、例えば、始業時に挨拶をするとか、調理実習の試食のときに食事のことばをいうとか、色々なところで建学の精神の具現化ができるのではないかと考えている。
- 緒方：3ポリシーについてはキャンパスガイドにも明記しており、入学前から説明をしている。
- 内野：今の説明で理解できた。建学の精神が各学科で活かされていると確信をもっていえると思う。

質問事項

3ポリシーについて学科内で継続的に検討がなされているか。

- 江原：基準 I - A - 1 に「建学の精神を定期的に点検している」、基準 I - B - 2 に「学科の学習成果を定期的に点検している」とあるが、3ポリシーについては各学科で定期的な点検をしているのか。
- 緒方：アドミッションポリシー（以下、AP）は以前から募集要項にも載せてきたが、カリキュラムポリシー（CP）、ディプロマポリシー（DP）は昨年策定したばかりである。今後見直しをしていく必要がある。
- 伊東：教育目標として栄養士養成を挙げているので、それに沿ったかたちで入学生にリメディアル教育を行っている。CPは、栄養士養成ということを主眼におくものであるが、栄養教諭やプラスアルファの資格もあるので、それぞれの資格についても検討し、考えなければならないと思っている。基本的に栄養士養成をもって学習成果とみており、それに従ったCP、DPとしている。
- 尾家：幼児教育学科のDPは、保育の本質や目的を理解し、社会の多様なニーズに対応できるよう、保育所、幼稚園、施設等、就職先のことを踏まえて、学生たちはどのような学習成果が必要かを

考えた。短期間で仕上げたため、今後また他とも合わせながら考えていかなければならないと思っている。CPは、より具体的でなければ学生に分かりにくいと思っており、今後の課題である。

□緒方：先日のALO説明会では、3ポリシーをPDCAにのせて随時見直しを図らなければならないという話であった。「去年決めたから、しばらくは変えない」というような性格のものではなく、毎年PDCAサイクルにのせて改善を図らなければならない。改善は、課題がないと思われる場合も、さらによくするための方策として示す必要がある。今回の認証評価の大きなポイントは、3ポリシーの表明と学習成果の策定、さらにそれらをPDCAサイクルにのせて改善していくことにある。そして、それが短期大学の質保証となり、学校改善に繋がるという考え方なので、その部分を十分に話し合っただけならばと思っている。学習成果については、具体的に明文化する必要があり、それをもとに3ポリシーが説明されなければならない。建学の精神から教育目標、教育目標から学習成果と展開させ、それを3つのポリシーへと繋げていく。本学では、これらを本年度中に見直したいと考えている。アセスメントについても同様で、そこに一定の仕組みを設け、量的にも、質的にも測定可能なものにしなければならない。全科目の授業アンケート、就職先アンケートはあるが、その分析までには及んでいない。各教科、委員会、事務についても同様で、毎年報告書は作成しているものの、これらも始めたばかりで未だ結果がフィードバックされているとは言い難い。

○江原：本学では卒業生アンケートを3年に1度実施しているが、平成24年以降とっていない。先日のALO研修会で、卒業生アンケートは毎年取るのが当たり前だという話を聞いて、本年度から毎年とろうと考えている。貴学の卒業生アンケートは、卒業後どの時期にとっているのか教えていただきたい。

□緒方：就職先アンケートは、新卒の職場が対象で、夏以降の就職先訪問で依頼することが多い。近隣の施設は訪問し、遠方については郵送している。本学は学生が少ないため、全就職先にアンケートをお願いするようにしている。ちなみに、ホームカミングデー（新卒者対象）を5月の終わりから6月に実施し、職場の悩みなどを聞いている。

□梅高：「アンケートの実施時期が早すぎる、1年くらい経ってからの方がいいのではないか」との意見もあったが、実習や就職の依頼も兼ねて訪問するため、現状はこの時期にしている。「卒業後3年くらいは追跡した方がよい」との意見もあったが、そこまではできていない。

○江原：実施時期の問題であるが、1年以上経ってしまうと、本学で学んだことよりも就職先で学んだことに関わってくるので、本学では1年未満を対象にしている。自己点検では、回収後のアンケート結果をどうPDCAにのせてフィードバックしていくかが問題になるが、貴学は何かシステムになっているか。

□緒方：戻って来たアンケートを学科単位で検討し、それをカリキュラムに反映させようとしている。

○江原：学科でアンケートを集計するのか。

□緒方：集計自体は自己点検評価委員会で行っている。

○江原：アンケート内容の検討はどのようにしているのか。

□緒方：アンケート内容も自己点検評価委員会で行っている。

○後藤：集計された結果を学内で共有するような会はあるのか。

□緒方：集計結果をもとに議論するような会はない。

○原：実施時期は就職後3カ月位がちょうど良いと思う。民間企業では、3カ月くらい経つと教育を直すので、その前に短大でどういう教育を受けてきたのかを評価し、学校にフィードバックす

る。1年も経つと変わってしまう。貴学の質問内容は良いと思う。こういう基礎的なことが身についているかを尋ねるのがよい。我々も参考にしたい。

教育方針について

□梅高：本学の教育方針について、これがいつ頃できたのかは承知してないが、かなり早い時期に制定されたのではないかと思っている。学生にはわかりにくい表現かもしれないが、学生に配布するしおりに記載し、入学当初のオリエンテーションでも話すようにしているので、学生もある程度理解をし、共有していると思っている。

□梅高：教育方針に示す「独立自尊」については、福澤諭吉が中津出身ということで、それを意識して入れている。実学教育というような意味でいえば共通点も多いと思う。生活の中で自己の資質を磨き、それを社会にどう還元していくか、どう社会に貢献していくかということである。

□緒方：教育方針は「どのように教育するか」ということなのに、ここでは「努める」とある。

□梅高：表現として「する側」と「される側」が混合しているところがある。ここでいえば「教育する側の立場」で教育方針を立てている。表現などは今後見直していきたい。

□梅高：学園創立110周年の時に教職員用の宗教教育必携をつくった。理由は、高校も短大もそうだが、生徒や学生はカリキュラムの中に仏教の授業があり、礼拝も必修単位にしているが、教職員は宗教的な話を聞くことが少ないのではないかと思い、より教職員の宗教的理解を深めるために作成した。本山参拝についても、学生のみならず、教職員にも参加してもらいたいと思っており、そこで研修を深めてもらえればと思っている。そういう意味での共有はできていると考えている。

□緒方：宗教教育委員長の私からも付け加えたい。先日、龍谷総合学園の宗教教育連絡協議会に参加したのだが、そこで研修した内容は学内の宗教教育委員会でフィードバックした。他学の宗教教育の様子を伝えながら、本学の現状、課題、今後の展望などについて話し合った。これは建学の精神の共有に他ならない。また、本願寺記念参拝は、本年度からの新たな取り組みである。これまでは学科ごとの研修旅行を実施し、何年かに一度の頻度で本山に参拝してきたのだが、「宗門校として積極的に本山参拝を行うべきだ」という学長の強いリーダーシップによって、本年度から毎年参拝する機会を設けるようにした。一人でも多くの学生・教職員が参加するように奨励していきたい。

○後藤：教育方針を学生に分かりやすく示すことは中々難しいことである。教育方針が開学以来一貫していることはすばらしいことであるが、それを現代の学生にどう伝えるのか、我々も常に考えている。言葉をわかりやすくするだけでなく、それをどのように伝えるか、ということである。本願寺参拝などは、実際に体験できるのでよいと思う。本願寺参拝は何名くらいの参加予定か。

□緒方：前期の段階で学生に告知し、その後募集を開始した。現在申込者は10名程度。後期も引き続き募集する。参拝式、本願寺境内見学を予定しており、希望者には帰敬式を受けてもらうようにしている。

○後藤：実施はいつ頃か。

□緒方：3月初旬で、2泊3日の予定。夏休みは、両学科の2年生が学外実習に出るためスケジュールの調整がつかない。2月、3月は幼児教育学科1年生が実習に出るが、他に日程が取れないので仕方なくこの時期としている。

学習成果の策定

- 緒方：現状、本学では学習成果の明文化ができていない。早急に取り組まなければならない課題の一つである。「学習成果を各学科でどのように策定していくのか」ということであるが、これまでは資格に絡め、教育目標に重ねて考えてきたが、今後は量的、質的に査定ができるような形で学習成果を策定する必要がある。「学習成果の獲得につながることを確認している」というところは、栄養士、保育士の就職先にアンケートを実施し、その結果を学習成果の査定の一つと見做してきたが、それだけでは不十分であるという認識を持っている。先日のALO説明会では、「どのような栄養士、保育士を育て、社会にどのように評価されているのか」を査定すべきだとのことであった。アンケート内容がそのまま学習成果の査定につながっていくように改善し、結果の分析によって新たな課題がみえてくるようにしたい。単に成績や就職率などの数字だけではなく、汎用的な部分の査定も必要である。
- 後藤：「どのような栄養士、保育士」という、その「どのような」というのが難しい。内容を策定し、それを文章化して、それによって成果を見ていきなさいということだろうが。
- 緒方：この前の研修会で一例として挙げられていたのが、「授業が始まる前に挨拶をしている」であった。将来保育者になるにあたって基本的な挨拶は大事だから、授業の前と後に挨拶をする、というものである。本学も授業を始める前と後で挨拶をしているので、その取組みを報告書に記載し、説明すればよいと思っている。今から何か特別な取組みを始めるよりは、既にやっていることを再認識・再評価し、それを報告すればよいと感じた。

質問事項

「必要に応じてFD・SD研修会を開催している」とあるが、その頻度はどれくらいか。

- 梅高：多くても年に2度ほど。前回は情報管理についての研修会であった。
- 緒方：学園全体としては、定期的に宗教教育、人権教育のFD・SD研修会を行っている。
- 梅高：宗教教育研修会は高校の教員の都合に合わせているため、短大教職員はなかなか出席できない状況にある。できるだけ多くの教職員に参加してもらいたいと思っている。
- 緒方：幼稚園の教職員にも声をかけている。4月からは保育所の所長、主任にも案内したい。
- 江原：FD・SD委員会の規定はどうなっているか。
- 梅高：FD・SD委員会は企画運営委員会と兼ねており、そこでFD・SD研修会の計画を立てている。
- 室長：規程はあり、それに基づいて実施している。小規模校のためFDとSDを兼ねている。
- 緒方：授業評価アンケートは教員自身で集計し、それを提出するようにしている。非常勤講師のアンケートは学習支援センターの事務で集計する。専任教員は、学内のサーバーにアップされたアンケート結果を必要に応じて見ることができる。

質問事項

自己点検評価に係る実務作業はどうしているか。

- 緒方：作業部会を組織し、現在6名でやっている。作業部会のメンバーがアンケートの集計や記録も

行っている。報告書の作成は委員があたる。

○江原：報告書の作成は委員がするのか。

□緒方：文章は委員が書くようにしている。

○江原：材料は作業部会が用意するのか。

□緒方：必要な材料は作業部会、もしくは関係の委員会が用意している。

○江原：どのような割り振りでやっているか。例えば、基準Ⅰはどのようにしているのか。

□緒方：基準Ⅰは学長が担当した。それを委員が見るようにしている。今回は課題まで行き着かなかったが、もちろん課題はある。

基準Ⅱ

質問事項

「社会的ニーズや時代の変化に即応することで～」について、3ポリシーと建学の精神の関連性、社会的ニーズ、時代的变化に即応するという、この3つの関係を具体的に示してほしい。

□梅高：建学の精神自体は変わらないが、社会的ニーズ、特にそれぞれの資格において求められるものは変わっていく。幼児教育学科でいうと「子ども子育て支援新制度」が来年度より始まり、幼稚園や保育園の形態も色々と変わる。そして、それぞれのところで求められるものを短期大学で身につけさせなければ、将来職場で通用しない。その観点から、3ポリシーの変化が余儀なくされると考えている。

質問事項

課題の中に「カリキュラムツリーの作成が急務」とあるが、なぜ急務なのか。

□緒方：先般のALO説明会で「学生に対してカリキュラムを可視化（見える化）させなければならない」という話があった。カリキュラム可視化のため、その第一歩がカリキュラムツリーであり、カリキュラムマップであると考えている。

○江原：「急務」と書いてあるのに、基準Ⅱ-A-1の改善計画には出ていない。なぜか。

□緒方：改善計画に示されるべき内容であると認識している。貴学はカリキュラムツリーやマップを作成しているか。

○江原：作成していない。今後必要だと考えている。いくつかの大学のホームページにも掲載されているため、検討していきたい。

質問事項

食物栄養学科の内容で「現状のカリキュラムでは不十分～その専門性が高められるようなカリキュラム編成、または開講方法が検討されるべき」とあるが、現実問題として可能か、また現状どのように検討しているのか、その見通しはあるのか。

- 伊東：食物栄養学科では、栄養士養成を主目的としているが、さらに栄養教諭、医療事務関係の資格を取らせている。それを一つのカリキュラムの中でやっていることから、意欲のある学生は授業が増え、それぞれの専門をプラスアルファすることができない現状にある。そうであるから、栄養教諭、医療事務関係の授業を同時開講にするとか、医療事務関係の授業を特別開講にするとか、カリキュラム編成上、何らかの工夫が必要かと思う。やはり主目的が栄養士養成であるから、先ほど社会的なニーズということも出てきたが、栄養士も保育園や病院など職場も分かれてくるので、幼児関係であれば福祉や子どものことをもう少し学ばせたいし、病院関係であれば医療について学ばせたい。それぞれにプラスアルファとなる専門的知識を与えたいと思っても、資格を全部取る学生は時間割が詰まっている。「栄養教諭と医療事務関係の資格を選択制にする」という方針を出しているが、頑張ろうとしている学生がいるため、今は少し足踏みをしている。栄養士に関するカリキュラムをもう少し充実させたいと考えているが、そのような専門性を高める授業を選択科目にした場合、結果的に取らない学生が多いと思う。いかに学習意欲を高めるかが課題である。カリキュラムの整理と、学生の学習意欲を高めることが課題である。
- 江原：本学も同じである。モチベーションの高い学生は空きコマもなく授業を受けている。1年生の前期までは横並びであるが、後期になると差が出てくる。卒業単位ぎりぎりでもいいという学生もいる。
- 伊東：それをどうやって気持ちを引き上げるか、面白みを持たせたらいいのかと考える。やる気のある学生は地域活動で実際の栄養士の姿をみせれば、もっと勉強したいと思うようになるが、そうならない学生が難しい。そういう学生に興味を持たせたいが、なかなか難しい。
- 後藤：より高い目標を持たせることは、今の学生にとっては難しい。これは学生募集にも関わることなのだが、栄養士、保育士資格以外に何か付加価値を打ち出さないといけない。「栄養士や保育士の資格を取る以外にも、うちの短大にはこんな付加価値がありますよ」と示してみるとか。
- 江原：保育学科のパソコンの授業を持っているが、モチベーションはどちらかに振れる。入学時から、モチベーションの高い学生にみんなが合わせていけるようナビゲートすることが大切だと感じている。
- 伊東：年度によって学生の動きが違う。学力にはそこまで差はないが、それぞれに雰囲気があり、いいときは就職もお互いにカバーし合っていく。クラスがバラバラだと実習も教員がハラハラするようなことがある。しらけている学生が多いとモチベーションを上げるのが難しい。
- 内野：保育科の日本語を持っているが、学生の質は年によって振れるところがある。授業の中で学生たちの積極的な発表が多いときは評価するようにしている。叱責についても具体的に示す。手本を示すばかりではなく、学生たちの中でお互いに見せ合うことも大切で、学生が変わってきているように感じる。
- 緒方：クラス制は取っているか。
- 江原：保育学科はクラス制を取っており、コミュニティ学科はコース分けをしている。
- 緒方：コースには担当がいるのか。
- 江原：アドバイザーがいる。
- 緒方：1人ずつか。
- 江原：保育学科は6、7人に対して1人。その年の学生数による。コミュニティは各学年の各コースにアドバイザーがいる。10～20人くらいを1人で担当している。
- 緒方：コース長はいるのか。

- 江原：コース長はいない。
- 緒方：学科の会議は全員か。
- 江原：そう。コースの会議もある。
- 伊東：アドバイザーは履修登録や就職のサポートもすべて行っているのか。
- 江原：そう。全体で履修登録の説明を行い、その後、人間コミュニティ学科はアドバイザーに提出するようにしている。アドバイザーの印鑑をもらった用紙を教務に提出する。アドバイザーは科目を確認して印鑑を押す。
- 緒方：保育学科はクラスがまたがって6名になることがあるか。
- 後藤：学籍番号順で分けているため、それはない。
- 室長：チューターとアドバイザーの違いは。短大はチューター制が多い。
- 江原：明確な違いはない。先生と学生が合わないこともあり、そういうときは入れ替える。基本的には機械的に分けている。
- 緒方：共通基礎科目は両学科横断的に行っているのか。クラス別に行っているか。
- 江原：保育学科は2つに分けている。大教室でやる科目に関しては合同で行う。人間コミュニティ学科に関しては、共通で全コースの学生が受ける科目もあり、それは必修科目に多い。専門科目は分かれている。別のコースの授業を横断的に受けることもできる。
- 緒方：保育学科の学生がコミュニティ学科の授業を受けることができるか。
- 江原：難しいが履修できる科目もある。
- 伊東：それは卒業科目に含まれない選択科目か。
- 江原：そう。選択科目に興味のある学生が履修している。

質問事項

幼稚園教諭免許の取得状況について説明してほしい。

- 尾家：幼稚園教諭免許の取得は、25年度卒業生で30名中20名であった。

午後の部

基準Ⅱ－B 学生支援

質問事項

「授業評価の結果の扱いについて、個別教員に還元している」とあるが、その還元の方法と、それが実際に授業改善に活かされているかどうか、またそれをどのように確認するのか、その方法について教えてほしい。

- 緒方：授業評価アンケートの結果は、学内サーバー上で閲覧可能であり、学科別にそれぞれの課題を検討するようにしている。
- 室長：授業評価アンケートは、各担当教員が結果を処理しており、これには問題がある。学生からも

批判が出ている。全てをネット上でやってほしいという希望も出ている。小規模校なため、統計のほとんどを事務職員が行っている。結果については、各教員のところで授業改善に繋げるように配慮はしている。

- 内野：例えば、結果を見て、学長、副学長が担当の教員、あるいは学科の教員へ指導することがあるか。
- 梅高：今まではない。PDCAサイクルも学科単位にとどまっており、全学的・組織的な取り組みを今後どうすべきかが課題である。基準Ⅰにあったが、組織的かつ継続的ということですので、1回のPDCAで終わりではなく、新たなサイクルをリスタートさせているので、そこは継続的な取り組みであるといえる。学長が入って課題や改善点について指導するところまではしていない。
- 内野：そういった指導というのは学長、副学長でも難しいと思うのだが、高校ではしなければならなかった。必ず評価の中には良いところと悪いところがあるので、良いところを評価しながら改善点を指摘する。そういう指導をして頂ける方がよいと感じる。
- 後藤：自己評価という形だが、改善に向けてのフォームはあるのか。
- 室長：フォームはある。
- 江原：提出するのか。
- 室長：学長に提出する。毎年行っており、評価を見て自分の問題を分析し、改善するところまで動いている。もう一つは、多くの学校でなされている授業評価のオープン化であるが、短大規模では学生のレベルの問題もあるし、四大の授業評価の発想なり対応と全然違うので、それを公表することに意味があるのか。高校レベルの評価だと特にそれがある。それが四大だとなくなるのだが、本学の場合は高校と同じパターンである。第三者評価でどこまで求められるかわからないが、公表まで求められるのが本来の筋だと思う。
- 緒方：授業評価アンケートについては公表を義務づけてはいないが、公表が望ましいとのことである。
- 室長：「望ましい」とはどういうレベルか。
- 緒方：各授業がどのような評価を受けているのかを、教員側だけではなく学生にも伝えられる仕組みが望ましい。各ポリシーについては全面的に公表が義務づけられているが、授業評価についてはそこまで求められてはいない。
- 内野：高校の場合は、自己評価は自分のことを書いて先生のことを書けと義務づけられていた。
- 室長：昨年から2ステップに分けた。単純な自己評価ではなくて、まず学生自身の自己評価をするようにした。しかし、結局項目が読めない。非常に極端な例だが、問われている意味が理解できない学生がおり、適当に○をつけていく。○の配置によって結果が全然違う。そういう学生が酷いことを書く。それから、叱られた学生も酷いことを書く。自分が書いたことを先生に知られたくないという学生も随分といる。
- 内野：それがそのまま公開となると問題がある。
- 室長：その通り。昨年の1年生と本年の1年生は全然傾向が違う。基礎力から考え方から違う。アンケートをとってみると完全に違って相関がない。同じ学校なのかなと思う。普通だと同じ傾向を持つべきなのに両極端で、非常に怖いと感じる。途中で分析方法を変えた。
- 緒方：授業の15回目にアンケートを取るようになってきているが、その週は学生にとって毎時間がアンケートになる。教員はその時間だけだが、学生は「またか」という気持ちになる。アンケートは最後の授業に取るのがいいのだが、現実にはこのような問題も生まれている。私の場合、コメント欄にほとんど何も書かれていない。もう少し授業の課題がわかるようなコメントがほしい。

- 江原：授業評価はすべての授業科目で行うのか。
- 緒方：全科目で行う。
- 江原：非常勤も含めてか。
- 室長：非常勤も含めて全科目である。
- 緒方：演習も講義もすべて。
- 江原：本学では1科目もしくは2科目しか実施していない。
- 梅高：本学も以前はそうであった。数年前から今のようにしている。
- 江原：「授業担当教員は担当科目について自身で集計する」とあるが、実際は事務職員が集計しているのか。
- 室長：非常勤講師は事務職員が集計している。
- 江原：集計を担当教員がやることに対して何か問題はないか。
- 室長：それが課題であると思っている。方法論の問題で、集計の信頼度をどこまで上げるかということ。
- 江原：本学も少人数の学校であるため、字とかコメントを見れば誰が書いたかわかる場合がある。成績評価を出す前に担当教員がアンケートを見る場合、それが学生の成績評価に影響する可能性がある。そこで学生は「変なことが書けない」という。
- 室長：その通り。だから、書かない学科と書く学科に分かれる。
- 江原：本学では、基本的に担当教員が授業中にアンケートを取り、その後は担当教員以外が集計をする。今年度からは、アンケートを取るのも別の教職員にしたいと思っている。担当教員がいないところで取るようにしないと、本人たちは書きたい事が書けない。
- 室長：全部のパターンを今まで経験してきた。すべてを担当教員がすると差し替えをする教員もいる。教員評価、昇級に関わることなので、悪いものを全部抜いて出す。そこで事務職にやらせるとなると、事務職に負担がかかる。次にネットでやろうということで、コンピュータ室で全科目やらせる。入れやすいところから入るので、順番によって結果が変わってくる。よい授業はちゃんとよい結果が出るが、悪い方がどういにか問題がある。どの方法でも結局問題はある、というのが私の印象。できればシビアな意見を聞くくらいがちょうどよいのだが、本学の学生はあまり書かない。恨みは書く。
- 伊東：担当者が全科目するのは大変である。私の場合は、自分の評価に関して毎年だいたい同じことを書かれる。直しているつもりでも、だいたい同じことを書かれる。機械的につけているものも見られるが、だいたい平均すれば同様な評価で、学生をある程度信用してもいいと思う。ただ学科長として、学科ごとの平均を見たときに、学科間の差を感じる。食物栄養学科の授業の特色的な部分なのか、全体的にみると幼児教育学科との差を感じる。ただ平均すれば、そんなに極端なことはなく、年によって大きく違うことはないと思う。
- 江原：報告書をみて違和感があったのは、「担当教員自身が集計する」というところ。これは改善したほうがよいと思うし、報告書にも書かない方がよいと思った。
- 江原：もう一点。14ページの「学習意欲や学力が乏しい学生に対しては、1年次前期に開講するゼミナールにおいてリメディアルを行っている」とあるが、ゼミナールⅠは必修科目か。
- 伊東：選択科目である。食物栄養学科では計算力が必要だから、基礎学力テストをし、理解度別にグループ分けをしている。計算の苦手な学生には基礎計算の練習をさせている。ゼミナールは選択だが、栄養士必修のプラスアルファの科目になるので、一応全員とるような形にしている。もう

一つは調理である。学園内の高校に食物科があり、そこから来た学生は調理技術があるが、他から来た学生には調理技術がない。そのため、学生の様子を見ながらグループ分けをしている。

○江原：入学後に一斉試験を行っているのか。

□伊東：食物栄養学科の1年生に関しては、基礎学力である計算や読解力、漢字とか、そういったものを全部やって、それである程度グループ分けをしている。国語はできるけれども数学は苦手だとか、そういう学生に関しては、それぞれのところで何回か同じようなことをやっている。

□伊東：例えば、国語も数学も弱い学生はそれに合った課題をやって、数学だけが弱い学生は数学のところを少しやるとか、教員が手助けしてやっている。調理だったら、調理実習室で基礎的なことをやらせている。今年の1年生の場合は、クラス担当が計画を立て、全部できる学生にはさらに進んで栄養価計算の練習をするなどしている。

○江原：文章を読んでいると、学習意欲や学力が乏しい学生をどうやって集めるのかということ、必修じゃなくて学生が集まるのかと疑問であった。

□伊東：入学直後なので、学生は素直に履修する。

□緒方：幼児教育学科のゼミナールについても同様の質問があった。

□尾家：まず導入教育として、基礎的な知識や能力を身につけさせるため、入学後のオリエンテーション時に施設見学をしたり、保育所見学をしたりしている。1年生の夏休みには、プレ実習もしくはインターンシップを兼ねた実習に出している。これは希望者だけだが、ほとんどの学生が参加する。保育所もあるが、学童保育が多いようである。1年次、こういうところで実際に子どもたちと関わっていく。また、これらとは別にゼミナールⅠを設けている。これは座学だけではなく、実際に動いて、例えば掃除だとか、今、雑巾を絞るようなことができない学生もいるので、実践を踏まえての講座を設けている。これは、幼児教育学科の専任教員が、各自受け持って行っている。選択科目だが、1年次の前期なので、全員の学生が受講する。

質問事項

NASデータサーバーの活用法はどのようなものか。

□室長：学内サーバーは、1つがデータサーバーで、学生の個人情報を全部入れている。もう1つはNAS的な扱いで、フォルダを共有しているようなシステムである。セキュリティ上解決しなければならない問題はあるが、とりあえず許可された権限をもっていけば同じフォルダを共有できるわけであるから、そこを見ていける。一応、学生用のものとは全くルートを変えているので、学生からはアクセスできないようにしている。

○江原：V-LAN（ルータ？）を切っているのか。

□室長：ルートを変えている。外部接続も二系統で、教職員と学生で完全に分けている。学生のデータが入っているということで、それは今整備している。ただ、学生のデータについては簡単にアクセスできないように厳しくしているし、バックアップも行っている。もう一つ別にデータを保存しておきたいと思っている。今は磁気ベースではなく新しいものがあって、定期的に焼いて切り離していくやり方がある。外部からアタックされると、いくらバックアップをとっていても全部だめになる。やはりウイルスは入ってくるし、それをゼロにするのは難しい。校内の分については、学内でいろいろな文章を共有できるから、そういう意味では小さいところながら効率的で

ある。問題は紙ベース中心というところで、すべてのものをメールでやり取りする時代に、環境も揃っているわけだから、メールでやり取りできる分はメールでやり取りする。その代わり教職員にもルールを守ってもらう必要がある。教員の資質的なもの、情報モラル的なものが問われるし、どういう機械を使うかということもあるのだが。やはり課題は、ネットワークの活用であり、メールが学内でもっと活用されるべきだと思う。

○江原：情報の共有がメリットではないか。

□室長：情報の共有は以前からやっていた。全学的なシステムとして、成績等も担当がすぐにみられるようなものを作ればよいが、固有のデータベースなため、一旦それが走り始めると汎用化したものを使えない。移管にもものすごく費用がかかる。もう一つ困っているのが、使っているソフトウェアが古くなっていること。XPを境目にして、そこをどうするか。昔のデータをどう移管していくかが課題である。今、小規模なので、ある程度紙ベースでまわっている。ICTのメリットを十分に生かしていないような気がしている。

□緒方：貴学のパソコンの利用状況、支給状況はどうか。

○江原：基本的に全教職員がメールアドレスを持っているので、全員がパソコンを使っていることになる。メーリングリストで全員にメールを送るようにしているため、基本的に1人1台のパソコンを使っている。すべてが支給されているかといえば、実は支給されたパソコンを使っている教職員と自分で持ってきたパソコンを使っている教員がいる。セキュリティ面でいくと学校で対策しないといけないのだが、教員がしっかりとウイルスのソフトを入れているかどうか把握できていないところがある。

□緒方：パソコンはLANでつながっているか。

○江原：V-LAN（仮想的にネットワークを分割）で切っている。学生と教員とは違うネットワーク。研究室と事務室は教職員のLAN。教室等は校内LAN、無線でつながっている。学生は自分のパソコンを持ってきたりして使っている。学生用のLANはパスワードを入れないと使えないようにしている。

公開授業

質問事項

公開授業は指名か、それともローテーションか。

□梅高：学科からの選出（指名）ということにしている。また、どのように評価しているか、フィードバックはしているか、ということだが、終わった後に研修会を行い意見を出し合っている。

○藤木：研修会で出た教員の意見を何らかの形で授業改善に生かしていると思われるが、プロセスとして研修会の後はどのようなスケジュールになっているのか。

□梅高：だいたい研修会で終わりにしている。

□緒方：あとは学科で話をしたり、個人的に意見交換したりしている。

○藤木：それはFD研修会か。

□室長：FD研修会である。

□緒方：委員会の系統図があるかということで、別途資料を用意した。本学には学生支援センターがあり、そこで学生の学習面、生活面のサポート、また入試等の業務も行っている。

質問事項

教務関係のパッケージソフトを導入しているか。

ラーニングコモンズの内容を説明してほしい。

□室長：基本的には特殊なものを使わずに、校務サーバーのソフトを使っている。教員も学生のICT教室も同じウィンドウズ2008のサーバーである。端末の処理、文章系はファイルメーカーの古いバージョンが入っており、それをマイクロソフトオフィスに移行していきたく思っている。できるだけ汎用なものを採用したい。特殊なものを使うとバージョンアップのときに大変である。パーソナライズは外注で、使いやすい形にしている。ただ、バージョンはどんどんアップしていくので、その整合性の部分で常に手入れが必要、費用がかかる。5年をめどにリプレイスしたいが、予算的なことがあるので難しいこともある。ラーニングコモンズについては、100人程度の学生を想定している。学生ホールの一角に自由に使えるパソコンを設置し、WI-FIも使えるようにしている。セキュリティの問題があり、今は休止中である。しっかりとしたサーバーをつけないと怖い。ラーニングコモンズではそういうことに困っている。なぜ学生ホールに設置したのかといえば、空調が効いた部屋が欲しく、適当なところがなかったため、とりあえずそこでスタートした。活用はされていて、いつも学生が何人かでやっている。もう少し大きい部屋にしたいと相談している。いずれにしても、そのような場所が必要で、ディスカッションできる場所も教室以外に要ると思っている。空調をつけて自由に使い、オープンで管理しやすいようなICT環境が必要。ICT教室もラーニングコモンズに準ずるような形で使用しているが、利用時間の問題がある。勤務時間の問題もあるので、届出制で19時頃を目処に使わせている。「朝開けてほしい」という要望もあるが、一々の対応はできないので、学生ホールのものを利用するように話している。フリーで使えるパソコン環境を整備するのが課題で、図書館も含めてそういう環境が必要である。

○江原：具体的には何台置いているのか。

□室長：動いているのは1台。

○江原：プリンタは。

□室長：プリンタも1台。プリンタがコピー機代わりに使われている。

○江原：写真やノートを印刷しているのか。

□室長：スキャナがついているのでコピーをしている。

□室長：ラーニングコモンズではないが、スマホ等の充電対策を講じた。教室での無断充電が目立ったので、ラーニングコモンズ界限でスマホ等の充電ができる環境をつくった。

○江原：学生としては、充電に少なくとも30分前後はかかるので、授業中にさしておきたいという学生が多いのではないか。

□室長：放置している。あくまでも自己責任で許可をしている。

○江原：教室充電はどうしているか。

□室長：その場合はこちらで預かり、処分をしている。学生ホールはラーニングコモンズ以上の機能があり、そこで話をしたり、レポートを書いたり、食事以外でも利用率があがっている。

○原：本学は食堂を外部委託しており、時々、学生の利用が少なくなると「減ってきました」とブ

レクチャーをかけられる。貴学の食堂には何人くらいの職員がいるか。

□山本：本学も業者に委託している。補助を100万円程しており、光熱費などもすべて学園がみている。そういうことで経営をやっている。今、学生支援センター長とも運営の形態を模索しているところである。

○原：女子寮の閉鎖については、保護者から何か言われたからか。

□山本：それは全くない。離島奨学生など県外から学生を集めるようにしてきたが、遠方から来る学生が皆無となったため。

□梅高：最後は3人であった。

○原：本学は県外の学生が多い。県外については固定費を半分にしている。40名のうち半分が県外の学生。県内の遠いところの保護者が、「どうしてこの学生は半分なのか」と。そうなると割引せざるを得なくなる。唐津市の学生募集では「半分でいいですよ」と話をしている。統一して全部半額にしている。

□緒方：一律か。

○原：11,000円の個室利用料を6,000円にしている。できるだけ県外の学生を集めたいと思っており、寮はそのツールとなっている。

□緒方：寮の採算はどうか。

○原：採算は取れている。

□緒方：利用者はどれくらいか。

○原：40名ほどである。

□緒方：募集につながっているか。

○原：募集にもつながっている。

□緒方：先ほど携帯電話の充電の話が出たが、貴学にはそのような問題はないか。

○原：2年ぐらい前に昼休みに刺さっていた。「これは盗電だから、充電は家でしてきなさい」と注意した。今はほとんどない。

□室長：今の携帯は電池が1日もたない。だから、どこかで充電しているのではないか。

□緒方：授業中の携帯のマナーはどうか。

○江原：私の場合は、「机の上には絶対置かないでくれ」と言っている。あまり強く言わない先生の授業では、置きっぱなしの学生もいる。注意すると「字がわからなかったから辞書を使っていた」などと、言い訳はなんとでもできる。基本的には使わないように指導している。

□室長：ある大学の先生から、学生全員をラインでつなぎ、ラインを介して指導しているという話を聞いた。

○江原：私は逆に「ラインは使うな」と指導している。学生とはラインはやらないようにしている。なぜかというと、礼儀がない。簡単に「今どこ」と私たちにも言うので、「私に連絡をするときは電話かメールにきなさい」と言っている。「本文とタイトルを入れてきなさい」と話している。

□室長：常にアクセスするためには、いつも充電状態にしておかなければならないし、手元においておかなければならない。そうすると授業中に「直しなさい」とか「電源を切りなさい」とかの指導が難しくなる。本学では、そういうラインを使ってどうこうということはしていない。

○江原：本学ではラインをつかった学生募集を検討している。

○江原：教務システムに関して、ラーニングコモンズに教務システムは入れているか。

- 室長：どこまでの教務システムか。
- 江原：成績管理や学生管理など。
- 室長：本学はある程度紙ベースでやっておいて、担当が入力する。教務の事務職員を通してデータベースに入力している。
- 江原：そのシステムは何を使っているのか。
- 室長：独自のものを使っている。
- 江原：アクセスとか、エクセルか。
- 室長：その辺をパーソナライズしているだけ。
- 藤木：成績関係のことで、例えば証明書などに関したものはすべて一貫したシステムがあるのか。
- 室長：一貫というのは難しく、パッケージではなくメニューで使えるような形。
- 藤木：市販のものにはそういう形のものがある。以前からそういうものを導入する話をしているのだが、貴学でも、学生支援センターや教務関係でそういう話はあるのか。
- 室長：以前から使用しているものを少しずつ使いやすいうように手直ししているが、カリキュラム変更などがあると、なかなかそれに対応しきれない。市販のものではもっと厳しいと考えている。
- 緒方：履修登録も紙ベースで行っている。

質問事項

卒業や資格についての履修モデルを、学生に対してどのように示しているか。

- 室長：見本の資料を用意した。
- 緒方：配布した資料の一覧に教育課程の一覧がある。
- 室長：本学はこのような形でやっており、履修時に配っている。これを個人で入力できればいいのだが、実際は学生支援センターや学科がサポートし、オリエンテーションを通して行っている。卒業に必要な単位、栄養士にはこの単位が必要、教職をとるならこの単位が必要だと。さらに成績も見えてくるので、次に何が必要なのかも分かる。取れた単位と成績票を配布するので、それとこれが対応する。さらに、履修登録は、各個人が出したものを各学期ごとに入力してシステムの中で動かしていく。あとは成績を入力し、成績票までが一覧となって出てくる。卒業必修単位数も計算できるようになっている。
- 藤木：「卒業のためにはこの科目をとらないといけない」というような履修系統とか履修マップの原型にもなっているのか。
- 室長：兼ねていると意識している。今はこの程度でよいと思っているが、将来的にはもう少し最先端の研究成果を生かしたものがいいかもしれない。
- 緒方：こういった作業を学習支援センターが行っているのだが、同時に生活支援も行っている。業務の充実を計ってはいるが、仕事量が多く、なかなか厳しい状況にある。仕事のスリム化を目指す一方、現実には仕事が減らない。
- 室長：本学は、他の小規模の学校に比べても、学生数もスタッフ数も半分以下である。そういう中で、すべて同じようなことを求められてくる。国公立では、外部評価が入る場合、専門のスタッフが一人雇用になるのが当たり前。私学では、第三者評価を受けるだけでも、余分な仕事が教職員にかかってくる。授業は授業で専門すれすれのところをもたざるを得ない。そのような状況

の中で、第三者評価を受けることはかなり大変である。学生支援についても、できるだけ職員が手伝っているが、今の学生は書類一つひとりで書けない。どこに○をつけていいかも下書きをしてやる必要がある。それから、呼び出しに応じない。掲示板もあるが、それを読まない。非常に手間がかかる。登録だけでも簡単にいかない。そうすると教職員の手間は並大抵のものではなくなる。さらに生活指導の問題。幸い本学は、あまり生活面での問題行動はないが、奨学金をはじめ、外部からのボランティア、いろいろな窓口等々がある。教職員は、いま普通の日でも18時、19時は当たり前。朝は授業が9時10分からだが、1時間くらい前から準備をすると、かなり負担が大きい。できるだけ業務のスリム化をしたい。できるだけ、要らないものは無くしたい。「電算すればいいじゃないか」と言うが、電算すればますます業務が増える。「電算すれば動く」という迷信がある。電算に手間がかかるという意識がない。一方で、どんどん要求は高くなる。「機械でやるから」と。許しがたい。ミスプリントが許されない。どうしてもいいようなことが、どうしてもよくないことになる。逆に、学生相談でもう少し時間を取ってやりたいと思うが、なかなかそこまで行き着かない。事務的なことばかりに追われている。忘れ物の処理だけでも大変。教科書・ノートを置いて帰る。それをこちらが持っている、学生は「盗った」という。実に不謹慎きわまりない。そこからの学生対応になる。その辺り貴学はどうか。

○江原：同じようなところはある。「自己点検評価をもとに課題を記述する」というところに、「学生支援のスリム化を目指しているが、その方向性が見えてこないのが現状である」ということであるが、本学で報告書を作るときには、課題を出して、それをPDCAサイクルにのせるようにしている。改善計画には、必ず、この課題に対して「こういうことを次年度やろうと思っている」と極力書くようにしている。例えば、本学では体育館がないが、それを課題として書いても、今すぐにどうすることもできないので、それは逆に課題にあげない。来年度以降できそうにないものは課題の中から外して、来年度以降実行できそうなものを極力課題としてあげて、それを次の改善計画、さらには行動計画に入れていくようにしている。

□室長：つき合わせがまだ上手くできていない。今の助言から、担当も私たちもよく理解したと思うので、これからつき合わせをどうやるのか、どう矛盾をなくすかを話していく。ただ、できないことをあげるということも、現状をみてもらう上では必要かと思う。

□梅高：前回の第三者評価のときにもそのような話をした。来年度取り組んでいけるものを課題にし、しばらくできないであろうことは敢えて書かない。ただ、できるかどうかかわからないが、将来的な希望として、そのようなことを少し小出しにして出した。今回の場合は、来年度に向けてのこともあるが、現状整理ということで書いた。この中で、今年度できるようなものを中心に課題として挙げ、改善計画を立てたいと思っている。

□緒方：評価を受けるときに大事なものは、現状の報告ではなく、改善計画であり、行動計画である。これから本学としても、そういったところに焦点を絞って取り組んでいきたい。

○江原：それから、昨年度の報告書の中の改善計画及び行動計画がどうだったかということも、この報告書の中に入れておく必要があるかと思う。

奨学金

質問事項

特別奨学生制度の内容について説明してほしい。

- 原：本学にも同様なものがある。奨学金制度というのは支給か、それとも減免か。
- 室長：減免である。
- 原：一旦100%納めてもらって、その後奨学金を支給しているのではなくて、最初からその金額なのか。
- 室長：減免である。特別奨学生制度はそういう形。

質問事項

教育相談室と進路相談室について説明してほしい。

- 緒方：先日のALO説明会で、就職相談室を設ける必要があるということだった。
- 室長：「教育相談室の設置が喫緊の課題」とあるが、もうすでに動いている。今年度中にはできあがるので、課題ではない。あとは部屋の問題である。
- 江原：動き出したのはいつか。
- 室長：今年度からである。

その他

- 江原：全体を通して数字に全角と半角が混ざっている。それから、今回観点がブロックで書けるようになったが、文章の中には統一のあるところとないところがある。
- 緒方：観点があれだけ細かく示されているのに、「観点別記述をしてはならない」ということである。作文的にたいへん難しいが、今指摘いただいた通り、文言の統一を図りながら進めていきたい。

リーダーシップとガバナンス

質問事項

「学生数の減少からすると財政難を抜け出すことが出来ず、その改善には至っていない。アクションプランを策定して、経営の改善に向けた組織的な取り組みを推進していきたい」とあるが、その具体案があれば示してもらいたい。

- 梅高：本学は地元の学生が中心で、特に近年は遠方から来る学生が激減した。寮は、利用者が少なくなったから閉鎖した。そこで、いかに地元の高校生に募集をかけていくかがポイントになってくる。併設校の東九州龍谷高校には食物科があり、比較的安定して食物栄養学科への進学が見込ま

れる。40人の定員のうちの半分近くはそこから来る。年度によって増えたり減ったりすることはある。また、高短連携ということで、普通科の方でも幼児教育学科との交流をやっている。ただ、今のところ目に見えた成果にはなっていないように思う。若干、来年度の幼児教育学科の受験が増えるのではないかとってはいる。福岡県豊前市の青豊高校や、大分県宇佐市の宇佐産業科学高校とも連携をしている。大分県は市町村合併とともに高校の統廃合も進み、一番本学に来るような層の学校が統合された。進学校と合併すると、その層の生徒はいるだろうが、やはり四大志向になったり、あるいは他の就職とか専門学校へ行くようになったりする。地域でいうと、この3校と高短連携をやっている。それ以外の学校も含めて、いかに地域に密着して募集をかけていくかがポイントになる。さらに、学園全体でいうと、高校は高校で進学実績を出したいわけで、実績が出すぎると短大に流れない可能性も出てくる。そのこのところをうまくやらなければならないと思っている。また、今年から民間委託で福岡県側にある新吉富保育所を受けた。そこは施設としての扱いだが、これまで短大でいろんなことをやっても、大分県のメディアには出ることが、福岡県には出なかった。これからは、短大の幼児教育学科が何かそこでやっていくことによって、福岡県側のメディアにも出るようになると思う。それが学園の知名度を上げ、地元の足元を固めていくことだと考えている。経営的には短大が足を引っ張っているところもあるが、学園全体でそこは落とさないという形でやっている。これから先はわからない。他が厳しくなるということもある。

□緒方：高短連携ということ、学生募集につなげていくのが大きな課題である。

○原：高校から40名中20名が来るという話だが、食物栄養学科の定員は何名か。

□緒方：定員は40名。

○原：定員のうち半分が高校から埋まるということか。

□梅高：他から来るのが10名くらい。同じくらい来ればいいのだが難しい。

○原：本学園も龍谷高校に保育コースができた。将来的にはそこから30～40名来ると思う。ただし、これが入るには問題が2つある。1つは入学金を免除し、授業料を半分にすることで収入が減る。7割くらいになってしまう。もう1つは、75名のうち30名も来たら、半分くらいが徒党を組んで、人間関係がうまくいかないような気がする。その辺り貴学ではどうか。高校からのシェアが増えすぎて、食物栄養学科の方は学生間の問題はないか。

□梅高：若干はあると思うが、入学してしまえばそこまではない。それよりも、一番気になるのはオープンキャンパスである。体験入学をやるときに、幼児教育学科は問題ないが、食物栄養学科は例えば参加者50人～60人の中に数十名という併設校の生徒がいて、他校の生徒が少ししかない。そうすると、敬遠されるのではないかなと思う。全部併設校から来る、というイメージになってしまうのではないかと心配になる。入学してしまえばいいが、入る前が心配である。

□伊東：学年によって違いもあるが、入学当初できていたグループも、徐々に変化していく。併設校から来ても他校出身の学生と仲良くなり、1年くらい経つと相性のいい学生同士仲間になっていく。良い友だちができて卒業したという学生が多いかと思う。ただ、「最初は溶け込みにくかった」という感想はよく聞く。併設校と他校出身の学生が、ちょうど半々くらいになるのが望ましい。学科では、他校からもう少し来てほしいと思っている。

□緒方：オープンキャンパスはどうか。

□伊東：オープンキャンパスの体験実習は調理が多いため、こちらでグループ分けをしている。併設校の調理技術のある生徒は同じグループにして、他から来た生徒たちに「嫌だ」と思わせないように

に配慮している。

- 緒方：本学では年3回オープンキャンパスを行っているが、特に初回は併設校からの参加者が多く、他校の生徒は驚くのではないかと思う。制服を着て来るので、すぐに高校がわかる。
- 内野：貴学のオープンキャンパスが6、7、8月となっていたので、早い方が学生募集に有利なのかと改めて思った。本学は7、8、9月なので、遅くなるとかなり高校が決まってくるかと思う。
- 梅高：6月くらいに高校の県大会があるので、部活をやっていると土日は中々来られない。だから、それが終わった後から始めている。
- 緒方：高校のPTA、三者懇談の関係もある。高校では、夏休みから9月にかけて大学短大の推薦会議がある。それを踏まえた日程調整が必要であると考えている。土日に模試や学校行事が入ることもあるので、各月に行うことで「先月は無理だったが今月は行ける」といった場合もある。すべてに参加する高校生もいる。
- 梅高：併設校から来た場合は、授業料、入学金は減免という話をされていたが、本学も入学金の減免制度はある。以前は、成績優秀者という形や、その分を人数で分けていた時期もある。今は一律に何万円かを免除するようにしている。「他校から来ないのなら併設校からだろう」ということで、減免の額を大きくしたこともあったが、今は戻した。入学金を減らさなくても来る生徒は来るし、さげたからといって来ない生徒は来ない。ある程度は制度として必要かと思うが、今は少し元に戻している。もちろん延納や滞納ということもあるが、初年度の学納金が大きいため、入学金を減額して授業料を少し上げた。
- 原：本学も、入学金を20万から10万にして、その10万を学納金の中に持っていった。減免については授業料だけで、設備費などは減免の対象外にしている。募集要項に書けないこともあるので、そこは直接龍谷高校に行って別の案内を渡している。できるだけ外部にもれないようにしている。
- 緒方：佐賀市から鳥栖市までの通学モデルは、自宅からの通学圏内となるのか。
- 原：佐賀市とは限らず、佐賀県下のどこかから通学している。
- 緒方：佐賀市から鳥栖市までは電車か。
- 江原：そう。だいたい25分くらい。
- 緒方：ある大学では、複数の高校と連携をし、学園が違っても入学金を全免にしているところがある。
- 原：本学も私立高校5校と提携している。保育の連携が基本だが、少し幅を広げて人間コミュニケーション学科についても認めている。そこから来る生徒は入学金全額と、授業料を一部免除している。
- 緒方：それによって安定的な進学が見込めるか。
- 原：数は多くない。
- 江原：どんな形で高短連携を行っているのか。
- 梅高：短大が高校へ出向くかたちである。食物栄養学科は調理実習や実験が基本だが、幼児教育学科はどうか。
- 尾家：「保育基礎講座」と演習形式の「保育実践講座」の授業を行っている。
- 伊東：以前は高校生が本学に来て、実習室でやっていたが、高校が移動にお金をかけられないということで、こちらから教員と学生を派遣するようになった。
- 梅高：幼児教育学科は、高校生が放課後に来学してピアノのレッスンを受けている。
- 尾家：今年で3年目になる。併設校の生徒が対象で、希望する生徒がレッスンを受けることができる。年々希望者が増え、現在は2グループに分けてレッスンを行っている。

- 後藤：そういう生徒は入学するのか。
- 尾家：ほとんどが受験をすることを決めて来ていると思う。
- 江原：来ることが条件か。
- 尾家：条件にはしていない。幼児教育学科に入学した後ピアノが必要であることを知っていて、それを見越してレッスンに来ている。
- 後藤：豊前市、宇佐市の学校とはどのような連携か。
- 尾家：幼児教育学科は福岡県の県立高校と連携しているが、2年生対象に6時間の出前授業を行っている。
- 原：学校間で締結をしているのか。
- 梅高：締結をしている。
- 原：毎年更新しているか。
- 梅高：内容はあまり変わらないが、公立の場合は頻繁に校長が変わるため、毎年更新している。
- 原：公立ともしているのか。
- 梅高：併設校以外の2校は公立。宇佐の方は進学率の低い高校で、現校長からは積極的に連携の話をいただいた。しかし、なかなか進学とは結びついていない。
- 緒方：ちなみに連携をしている高校の生徒が事前に単位を取得できる制度はあるか。
- 後藤：それはない。
- 緒方：連携の具体的な内容は。
- 後藤：出前授業が中心。
- 緒方：連携校の入学者について、授業料減免等はあるのか。
- 原：提携校の提携書の中に入学金、授業料免除等の書類を入れている。私立高校なので、理事長と契約する。あまり変えなくていいというメリットがある。
- 緒方：提携のアナウンスは、短期大学の方からではなく高校の進路指導や担任がやるのか。
- 原：高校との連携は短大の学生募集のツールなので、積極的に声をかけている。
- 江原：高校生にどのくらい伝わっているかはわからないが、高校訪問を通して声かけを行い、なんとか本学に来てもらうような働きかけをしている。
- 室長：採用は何人くらいか。
- 原：授業料全額免除というかたちで5、6名。多い時は10名くらい出す。
- 緒方：社会人は何名くらいか。
- 原：年度によって違うが、2、3名くらい。
- 室長：佐賀地区は大学が多いが、他大学との提携または単位互換はしているか。
- 後藤：県下すべての大学と短大がコンソーシアムに入っている。
- 室長：コンソーシアムは互換性を提携しているのではないか。
- 江原：本学は鳥栖、他学は佐賀市内にあるので、本学の授業を聞きに来たり、本学の学生が聞きに行ったりすることは難しい。遠隔授業とeラーニング授業が中心となっている。学長の科目を本学の教室で行い、佐賀大学、西九州大学、西九州大学短期大学部、佐賀女子短期大学でも聴講できるようにしている。
- 室長：聞いている学生の割合は。
- 江原：基本的には本学の学生が目の前で受けているのだが、各大学については、いないときは0、いるときは5、6人というところである。

- 室長：オンデマンドでなくリアルタイムでやっているのか。
- 江原：オンデマンドタイプもある。
- 室長：それはどういうシステムか。どこにサーバーが置かれているのか。
- 江原：佐賀大学にある。そのシステムの中でやっている。本学で作成したコンテンツ、科目も2科目ある。他は佐賀大学しかない。他の短大は作っていない。佐賀大学の科目で本学の学生がいくつか単位取得科目として受講している。
- 室長：試験等はどういう形か。
- 江原：基本的に試験だけは受けに来るように言われる。本学の試験と重なることもあるが、その場合は試験用紙をもらって同じ時間にやるようにしている。
- 緒方：何年くらい前からしているのか。
- 江原：5年くらいになる。
- 室長：本学は小規模なので、「龍谷総合学園内で遠隔授業ができればいい」と話している。しかし、あまり動きはない。それができれば非常勤科目で助かる。
- 江原：三短大でやっているものもある。本学と西九州大学短期大学部と佐賀女子短期大学で、15回のうち6回をeラーニングで行い、各短大から2名ずつ教員が出る。6回分は毎年授業として流している。メリットは、学外の先生の授業が聞けるということ。残りの9回は各大学で授業をやる。学外演習ということで、例えば本学の報恩講座を聞きに来てもらうこともある。

質問事項

理事長が学長を兼務しているメリット、また問題点について聞かせてほしい。

「安定した管理運営を目指している」ということについて、その中期的な見通しを含めて説明してほしい。

- 梅高：学長のリーダーシップとあるが、理事長と学長を兼務しているので、学長のリーダーシップとは何かを伺いたいところもある。先に理事長になったので、併設の高校に行けば、学長の立場で行く場合でも、「理事長が来た、理事長が言っている」と捉える。そういう意味では「短大の学長が来た」というよりも「理事長が来た」、「理事長が言っている」となった方が短大のメリットになるような気がしている。「短大へ進学するように指導してくれ」というのも、理事長の立場で言えば、教員はそれなりに動いてくれる。それ以外でメリットを感じたことはない。これから教授会規程の見直しが必要だが、教授会が議決機関から学長の諮問機関に変わると、さらに学長の責任も重くなってくる。とは言え、理事長兼務の立場からいうと、経営に大きく関わることは別として、今後も教授会を軽視することはないし、何がなんでも押し通していこうとも思っていない。教職員の意見を聞きながら運営していきたいと思っている。また、長期的な計画は立てづらい状況にあるが、中津市の合計特殊出生率が1.9くらいで、なだらかな少子化傾向にある。これはダイハツの影響が大きいと思うのだが、短大に入る前の高校の段階で行くと、焦らずゆっくりと改革を進めていけばいいと思っている。県全体でいうと、高校には公私立の協議会があって、公私比率75：25、公立の定員がそこまで増えていかない。ということで、高校の時点ですぐと改革が必要だが、あわててやる必要もない。その中で、高校の普通科と高短連携をどう進め

ていくのか、ということになる。併設の高校からある程度の人数を確保でき、他の高校からも一定数の学生が入学してくれば、短大の経営も安定する。もちろん、短期大学の中長期的な計画をいろいろと考えなくてはならないが、大きな改組はしづらい状況にあるし、今後も幼児教育学科と食物栄養学科の二本立てでいきたいと思っている。まずは、基盤を安定させていきたい。校舎が古く、耐震などもできてないが、近いうちに高校の耐震が終わるので、次は短大。建て替えは無理だが、耐震は責務であると思っているので、その時にある程度の改修も出来たらと思っている。あとは、細かな債務の計画を立てていければと考えている。

○原：昨年、3ヶ月くらいかけて学園の10年計画を作ったが、12月に断念した。作り直さなければいけないと思っている。そのとき、各学校に将来計画を提出してもらったが、耐震が入っていなかった。調べたところ、高等学校の建物が2つ耐震に引っかかることが分かった。長期計画をつくるといっても、学園全体で作るのは難しい。今度は短大だけで作ったが、長期的視点で考えながら数字を出すのは難しい。数字に出すのをやめた方がいいと思っている。考え方として長期的な計画を持つことが大事なんじゃないかと分かった。数字にこだわると良くないと思う。経営の柱をいくらか作って、それでやって行くことが必要だと思う。

□梅高：以前、私が高校から短大に移ってきた時に、その当時の事務長と長期計画を練ろうという話になった。しかし、1年で頓挫した。財政面でどうしようもない、ということでやめてしまった。長期的なものは難しいと思う。高校の場合は地元中心であるため、ある程度の計算ができる。15歳で入学してくるわけだから、15年後がどれくらいなのか分かる。高校が安定していけば、そこからある程度短大の目途もたつ。高校の人数をみながら考えることしか出来ないと思っている。

○原：県の10年後の計画を見ると、佐賀県は少子化が進んでいくと予想される。

ホームページ

質問事項

ホームページ更新について、その頻度と担当者について説明してもらいたい。

□室長：現在リニューアルを進めており、来月から動かすようにしている。行事等で、常に担当教職員のパソコンからアップできるようなシステムにした。今までは厳しい状況で、特定のパソコンからしか更新できなかったが、それをウェブ上で処理できるようにした。様々なコンテンツがあるが、本学は情報系の学科もないし、誰でも更新を担当できるようなものを作ろうとした。また、大学ポートレートとの絡みをどうするかということで、これは第三者評価以上の内容が問われているため、頻繁に更新をしなければならない。

○原：本学は8月23日に登録した。中身は学長に見てもらっているが、変えていかなければならない。

□室長：権限が厳しい。

○原：補助金の減額に影響してくるので、来年以降は中身を十分にチェックしなければいけない。

□室長：ホームページとポートレートがリンクするようになっている。そのリンクとの絡みもあってコンテンツを考えている。具体的な要求や財政なども載せなければならないので、そういうものも

含めて内容を検討していきたい。ポートレートの方にも財政欄がある。

○原：どちらにも載せている。

□室長：調査で答えたものをポートレートはそのまま吸い上げてくる。本学はかえって見づらくなるため、PDFでおいている。また、ようやくスマホに対応した。高校生もスマホの普及率が高いので、ようやく作った。

□緒方：貴学の更新は学内でやっているのか。

○江原：私が学内でやっている。

□緒方：今のホームページは、立ち上げのときから担当しているのか。

○江原：そうである。

まとめ

高校の保育コース

□緒方：貴学園の高校保育コースは、普通科の中でのコース分けか、それとも総合科のようなものなのか。また、どのような資格がとれるのか、保育コースから進学する場合のメリットは何か、教えていただきたい。

○後藤：入学前の単位認定があるわけではない。龍谷だけではなく、他の提携校の保育コースから入学する学生の場合も普通の学生と同じである。

□緒方：高等学校の普通科に保育コースがあるのか。

○後藤：そうである。

○内野：保育に関わる単位と福祉にかかわる単位をいくつか設けてあって、基礎的なことを学んでいる。

□緒方：選択の授業が週に何時間かあって、そこで保育と福祉の授業を行っているのか。

○内野：保育コースの生徒はそれを選択している。

キャンパスガイド

○江原：オープンキャンパスは、キャンパスガイドをつくる段階ですべて決めているのか。

□梅高：4月の初めには日程を絞っている。キャンパスガイドは4月末に出来上がり、ゴールデンウィーク明けには高校訪問できるようにしている。

□室長：作業工程までいれて契約している。裏表紙をポスターにするので、デザイン料も安く済む。

□緒方：新入生の写真を入れたいので、それは最終的な段階で差し込む。

○原：4月の新入生なのか。

□室長：新年度に古いキャンパスガイドを配るよりは、新しいものの方がよい。ホームページとの兼ね合いもあるので、キャンパスガイドの情報が古くなったらホームページで新しい情報を流す。

○原：私は経費を削ると言っており、「基本的に写真は去年と同じでいい」というが、周囲に賛成してもらえない。「見る人が変わるので、同じでもいいじゃないか」というが、そうはいかない。

□室長：私も同じ発想。

○原：写真を変えたらものすごく時間がかかる。連休明けを目指しても完成は6月頃になる。しかし、結局新しい写真を入れようということになる。

□室長：流行があるみたいで、デザインなどのファッション性もある。手にとってもらわないことには

意味がない。

- 緒方：部数も少なくなくて済むようになった。以前は九州全域の高校に郵送していたが、最近は地元中心の募集なので郵送の数も少なくしている。部数を減らしたのだが金額はそこまで下がらない。募集効率も悪いので、結局はやめたいというのが本音だが、やめる訳にもいかない。
- 室長：結局、キャンパスガイドは高校生にとって生きた情報になっていない。今はスマホの時代といえる。
- 後藤：そう。もう少しシンプルに。
- 室長：本には基本情報さえあれば凝らなくてもいいと思う。これからはスマホでいかに読めるかである。しかし、要覧の形で記録として機能するので、それが学校に残っていく。10冊そろえば10年史ができる。学生支援センターで編集を考える時にはそのようなことを考えている。

ii 相互評価報告書の編集について

- 緒方：相互評価報告書の編集について、前回までと同様に会場校が担当し、報告書の表紙は指定の色（東九州は青）とする。報告書の中心は本日の議事内容で、特に第三者評価シミュレーションが中心となる。報告書の費用については作成する学校の負担とし、相手方に必要部数を郵送する。

iii 今後の相互評価活動について

- 緒方：相互評価会議については、これまで隔年で行ってきたが、それでいけば次回は平成28年度になる。貴学が第三者評価を受ける年度であるが、貴学から何か要望はないか。
- 江原：本学は平成28年度に第三者評価を受ける予定にしており、そのことを考えると来年度の開催が有難い。貴学が第三者評価を受ける年度なので、迷惑にならない時期にお願いしたい。
- 緒方：本学は次年度9月に第三者評価を受けたいと思っているので、相互評価会議は12月以降ということにしていきたい。
- 江原：2月か3月はどうか。
- 緒方：それでは、平成28年の2月、または3月に開催することとし、今後相互に調整を図るものとする。

おわりに

九州龍谷短期大学 ALO 江原 由裕

東九州短期大学と九州龍谷短期大学は相互評価協定が結ばれて以来、お互いに協力し、切磋琢磨して教育研究と大学運営が進められてきました。その間、本学と東九州短期大学の絆はより深まりました。

さてこのたびは、東九州短期大学が平成27年度に認証評価を受けられるにあたって、あらかじめ報告書の案を参照し、評価会議のなかで参考意見を述べさせていただきましたが、それらの意見が認証評価の際になにがしかのお役に立つのであれば大変嬉しく、今回の意見交換を私たちの今後の自己点検・評価活動、ひいては平成28年度に予定している認証評価に役立てたいと考えております。

今後いつそう東九州短期大学と本学とが姉妹校として協力し合いながら、教育研究活動、大学の運営にまい進してまいりたいと思います。

終わりにあたり、報告書の作成に尽力いただいた東九州短期大学の先生方に厚く感謝申し上げるとともに、両大学のさらなる進展と繁栄を念じつつ終わりの言葉に代えます。

東九州短期大学 ALO 緒方 義英

第10回を迎えた九州龍谷短期大学と東九州短期大学の相互評価会議は、東九州短期大学を会場に午前10時よりの開催となりました。後藤明信学長をはじめ九州龍谷短期大学の先生方には、早朝より鳥栖をご出発いただき、長時間に及ぶ会議に臨んでいただきましたこと、あらためて厚く感謝申し上げます。

さて、今回の相互評価会議は、平成27年度に決定している東九州短期大学の第三者評価のシミュレーションが中心となりました。会議では、本学が数年来取り組んできた自己点検評価活動について、九州龍谷短期大学の先生方よりご質問、またご指摘をいただき、その中で改めて本学が直面している課題が明らかとなりました。報告書の提出までわずかな期間となりましたが、今回の相互評価会議でのご助言を参考に、向後編集を重ねて参りたいと思います。

次回の相互評価会議は、平成28年春の開催予定で、東九州短期大学の認証評価報告と九州龍谷短期大学の第三者評価シミュレーションの予定となっております。翌年度に第三者評価を受けられる九州龍谷短期大学の自己点検・評価を通して、互いの課題と展望について検討ができればと考えております。

終わりとなりましたが、今回の相互評価報告書の作成にあたりましては、年度末のたいへんお忙しいなか、担当の先生方には多大なご尽力、またご協力を賜りましたこと、衷心より厚くお礼申し上げます。終わりのご挨拶といたします。

平成26年度（平成25年度実績）

九州龍谷短期大学・東九州短期大学

相互評価報告書

発行日 2015年（平成27年）3月

編集 東九州短期大学 自己点検・評価委員会
九州龍谷短期大学 自己点検・評価委員会

発行 九州龍谷短期大学
〒841-0072 佐賀県鳥栖市村田町岩井手 1350
TEL 0942-85-1121 FAX 0942-82-8411

東九州短期大学
〒871-0014 大分県中津市一ツ松 211
TEL 0979-22-2425 FAX 0979-25-3935